

老舎「小鈴児」について

——義和団事件描写に見る所謂愛国主義作家像の再検討——

渡 辺 安 代

一 序言

中国現代文学研究史上、老舎（舒慶春、字は舎予、一八九九—一九六六）に対しては、主として正義感の強い愛国主義者民族主義者であり、北京の下層社会を描くのが巧みなユーモア作家である、という評価が与えられて来た。⁽¹⁾ 本稿では、愛国主義民族主義の作家と呼ばれる側面を取り上げ、老舎の所謂愛国主義民族主義の本質を、近年その存在が明らかにされた彼の最初の小説「小鈴児」の検討を出発点にして再検討してみたい。それにより、老舎の全体像を捉え直す手掛りが得られると考えるからである。

二 初期作品「小鈴児」の発見

老舎の「我怎樣写老張的哲学」と「我怎樣写短篇小説」に次のような一節がある。⁽²⁾

学校での作文作詩の練習以外に「老張的哲学」を発表するまで、私は何か発表しようと準備して書いた事はないし、そのような希望もなかった。確かに、私は南開中学で教鞭をとっていた頃、学内誌に小説を一篇発表した事があるが、しかしそれは作品の数を揃えるためであり、「国語教師なら当然一氣に書ける筈だ」というような自信さ

え持っていなかった。(我怎樣写老張的哲学)

私の最初の短篇小説は、やはり南開中学で教えていた時に書いたものである。全く学内誌の編輯者の注文を適当にあしらうために書いたものであって、他意はなかった。十二、三年前の事である。それは特別に取るべき所もないし、私の創作経験の上でも少しも重要ではない。なぜならば、それは私の創作意欲を引き起こさなかったからである。私の僅かな創作の歴史は「老張的哲学」から数え始めるべきである。(我怎樣写短篇小説)

ここに言及されている短篇小説は、從來不明であったが、「小鈴児」と題し、『南開季刊』に掲載されていた事が、一九七九年八月に明らかになった。⁽³⁾『南開季刊』は、天津南開中学の教師生徒共同の雑誌で、一九二二年秋に着任した老舎はその出版委員の一人であった。⁽⁵⁾雑誌の目的は、學術研究、學術討論を主にしていたが、自由な言論の場という性格も持ち合わせていた。⁽⁶⁾掲載された他の作品を一覧してみれば、この雑誌がおよそ文芸誌的なものでない事は明らかである。⁽⁷⁾「小鈴児」は、その第二、第三期合本(一九三三年一月二八日刊)に舎予の署名で載せられており、老舎の言を借りれば、「数を揃えるため」「編輯者の責めをふさぐため」に書き上げた「取るべき所のない作品」である、という事になる。つまり『南開季刊』という學術研究を主にした学内誌に國語教師が出版委員の一人として、雑誌の性格とはやゝ不釣合いであるにも拘らず敢えて投稿した四千字足らずの小説が「小鈴児」であり、これが彼の言う最初の小説なのである。⁽⁸⁾

作品の登場人物については、老舎が後の作品の中で繰返し語っている彼自身の境遇と一致する点が多い。題名の「小鈴児」は北京北郊王家鎮の小学生徳森の綽名で、彼はいつも級長に選ばれるような優等生である。父親は小鈴児が赤ん坊の頃に南京で戦死しており、母親と二人暮しである。老舎の父親は一九〇〇年の義和団事件の時に北京で旗兵として連合軍と戦い戦死している。⁽⁹⁾老舎が一歳半位の時であった。母親についても、夫に死別してから針仕事などで生計を立

てていた事、子供に手仕事を覚えさせたがっていた事、同居していた夫の姉に苦しめられていた事など、老舎の母親と共通点がある。⁽¹⁰⁾その他、会話の中で、母方のおじ（大舅）と父方のおば（姑母）の事が話題にのぼる。小鈴児の姑母は父の死後半年位で他界した事になっているが、老舎の姑母も彼が中学の時に死亡している。どちらも非常に強い性格であるにも拘らず自分の甥を一応可愛がったという点で一致している。老舎の幼い頃の記憶の中にこの姑母の事が余程強く残っていたのであろう。⁽¹¹⁾大舅については、「小鈴児」の中では手に職をつけているか、或いはそのような仕事に近い人物に描かれているが、これは大舅の息子で旗兵でありながら塗装職人でもあった「二哥福海」に近いと思われる。⁽¹²⁾四千字足らずの小説に登場する人物の数には限度があるが、この小説に於ては主人公小鈴児が優等生で弁論大会に出ては優勝していたという老舎自身の少年時代を彷彿させるだけでなく、その家族関係も基本的には作者自身を土台にして設定されており、老舎の生い立ちを暗示していると言える。

三 老舎と義和団

小鈴児はある日先生に李鴻章の肖像画をもらう。そしてその日、父は彼が小さい頃に南京で戦死したのであるという事を、初めて母親から教えてもらう。大きくなったら必ずその仇を討とうと決心した彼は、「先打日本、後打南京」と心に誓って翌日から早速行動に移る。彼はまず体格の良い友達を集めて結社を作る。小鈴児が首領に選ばれ、彼らは強そうな名前をつけて呼び合い、秘かに体を鍛える。一方では優等生だった小鈴児が女の子をいじめたり、先生に逆たりするようになる。そんなある日、先生に言われて国恥地図を書いている小鈴児を張純という子が誘いに来る。

「今日は良い日だ。わかったぞ。洋人の子が一人、毎日自転車でオレ達の学校の北側を通るんだ。何とかして、ヤツをやっつけようじゃないか」と張純が言うと、李進才が「オレだって知ってるぞ。あれは北街の外人教会の子

だ」と横から口を出した。小鈴児が「氣をつけたほうがいい。ボクたちは学校のバッヂをつけ、制服を着ているから、殴ったらすぐわかってしまうぞ」と言うと、「弱虫。男なら自分のした事に責任を持て。先生がオレ達を罰したら、先生こそ国恥をはらすためには洋人をやっつけなければならぬと言ったではないか、と逆に言えばいいんだ」と李進才が教室の方を指差しながら言った。「その通りだ——でも服が破れたら母さんに叱られないだろうか」小鈴児は立ち上がり、服に着いた泥を落した。「おまえなんか本当に行かなくていいよ。こんなに弱虫で、将来日本をやっつけるんだってさ」王鳳起が小鈴児を差して言った。「やるよ。わかったよ。行こう」小鈴児は顔を紅潮させて、皆と一緒に摒伝いにぬけ出して行った。カバンを持つ事も忘れて。

翌朝、校長は極めて沈痛な面持ちで、講堂の外に白い揭示板を立てた。そこにはこう書いてあった。「徳森・張純……は校規を守らず、大勢で暴力をふるい……規則により退学……」

小説はここで終わるが、ここに引用した少年達の行動はまず仲間を集めて結社を作り、拳で体を鍛え、そして将来日本を撃つ筈であった事も忘れて、突如として教会の子を襲う。彼らが子供なりに国のために戦おうとして採った手段は、十九世紀末中国に侵入して来た列強に対する抵抗を、一番身近な外国的要素、目の前の敵であるキリスト教会や宣教師、中国人教徒に対する直接行動で現した義和団の行動様式を真似たものであった。その上、少年達はこれが先生から教えられた救国の方法であると信じて行動したにも拘らず、退学という処罰を受ける。丁度、現実の義和団事件の結末が、李鴻章らによる辛丑条約の調印という中国にとって屈辱的な形で終止符を打ったのと同じ終わり方である。

先に述べた通り、老舎の父は一九〇〇年の義和団事件の際、北京に侵入して来た八ヶ国連合軍によって殺された。幼い時から母親を通してその頃の情況を聞かされて来た老舎の内部に、原体験としてこの事件が深く根ざしている事はすでに指摘されているが、⁽¹³⁾今回発見されたこの「小鈴児」は、彼が第一作に於てすでに義和団をテーマにしていた事を明

らかにしたと言える。

それでは、老舎はその後の作品の中で義和団とどのように係って来たのであろうか。彼が義和団を正面から扱った作品に戯曲「神拳（原題、義和団）」がある。⁽¹⁴⁾これは一九六一年に義和団運動六十周年を記念して書いたものであるが、その後記とも言える「吐了一口氣」⁽¹⁵⁾の中で、連合軍侵入の様子、父親の死、自分にふりかかった危険などを述べた後に、次のように言う。

以上述べて来た事は、あの大虐殺、大掠奪、大恥辱の中での小さな出来事にすぎない。もし当時私がすでに記憶する力を持っていたら、私は必ず連合軍の罪業をより具体的に、より「偉大に」、より「紳士的に」書く筈である。当然、私はより一層義和団を理解し、愛する筈でもある——彼らに多少欠点があろうとも、彼らの愛国と反帝の熱情と勇氣は最も尊敬すべきものである。

このような形で、老舎は義和団に対する彼の特別な心情を語っており、義和団に強い関心を持っていた事を吐露している。

これに前後して、一九六一年又は六二年から、老舎は自伝的小説「正紅旗下」の執筆にとりかかっている。⁽¹⁶⁾これは清末に旗人の家に生まれた老舎が、自分の誕生から説き起こし、その頃の家族親類などの日常生活を細かく描写する形で展開していくのであるが、十一章まで、主人公がまだ一歳にも満たない時点で中断している。七章以降、十成という義和団志願の青年の登場をきっかけに、教会、牧師、二毛子と舞台が家庭内から社会へと広がっていく段階で中断したのであるが、このまま書き進めて行けば、当然義和団事件、父親の死、その後の生活苦などを描いていったと思われる。

しかし、これからいよいよ核心に迫って行くと言うべき所での中断はどうした事であらうか。胡絮青は一九六二年後半の『劉志丹』批判に始まった党の高級幹部と文芸工作者に対する批判と、その後の張春橋の「大冨十三年」の運動が

「正紅旗下」の執筆を中断させ、しかも老舎をしてこの作品の存在についてすら口を閉ざさせた、と説明している。⁽¹⁷⁾ いずれにしてもこの第十一章での終わり方は不自然で、キリスト教と結びつく事によって自己を過大評価しようとする多老大や、アメリカ人牧師であるという地位を利用して一儲けを企む牛牧師を登場させ、その牛牧師がとうとう金持の旗人定大爺の招待をとりつけて、丁家を訪れ、その宴会場である亭へ入って行く所で終わる。その中で一体何が始まるのであろうか、という読者の期待は突然断ち切られる。この非常に唐突な終わり方は、外的状況の他に何か別の要因もあったのではないかという疑いを起こさせる。

これとは別に、友人羅常培⁽¹⁸⁾によれば、老舎は以前にも義和団事件後の北京を舞台にして家史的な歴史小説を書こうとした事がある。⁽¹⁹⁾ 羅常培らは資料集めに協力し、積極的にこの仕事を応援したようであるが、結局のところ完成しなかった。この事は羅常培が一九四四年に十年前を回想し、「七年間の流亡生活が実現を不可能にした」などと言っているところから、日本軍の華北侵入が始まった一九三四年前後から、三七年の彼の済南脱出頃までの事であったと推測される。「正紅旗下」はこの時の計画に再度挑戦したものと見えよう。羅常培の書き方からすると、老舎は当時相当の熱意を持ってこの仕事を進めていたと思われる。しかも、この時期は彼の一生の中でも多作な時であった。それにも拘らずこの計画が実現しなかった原因は、単に羅常培の言う様な外的環境だけにあったのであろうか。「正紅旗下」中断と同じ疑問がここでも生じる。

この時期はまた、本稿の冒頭で引用した「我怎樣写老張的哲学」「我怎樣写短篇小説」(一九三五―三六年)を書いた時と相前後している。この二篇は自分の創作経験を述べたもので、その中で自分の旧作について触れるのは自然な事ではある。しかし、この頃老舎は一方で「義和団事件後の北京を舞台にした家史的歴史小説」を書くという、彼の原点に一番深く立ち帰る小説の構想を抱えており、その線をたどって行くと、この南開中学時代の「小鈴児」にたどりつく。

家史と言うにはスケールが小さすぎるが、自分によく似た少年とその家族、そして義和団そのものではないが義和団的な戦い方をする少年達を登場させたこの小説は、まさに彼が当時試みていた大きな小説のモデルであると言う事ができよう。解放後ずっと戯曲だけを書いて来た老舎が、六一年に題材の多様化が主張され始めるとただちに「正紅旗下」の執筆にとりかかった事を見ても、このテーマが彼の中でずっと大きな位置を占めていた事が裏付けられる。その意味で、「小鈴児」は彼にとって重要な意義のある作品であり、二度に亘る「小鈴児」への言及は、題名を伏せ、所在も十分明らかにせずに書き出した、その謙遜ともとれる態度とは逆に、この小説に対する彼の愛着と関心の所在を暗示していると言える。

四 義和団描写を通した社会批判

以上のように「神拳」（一九六一年）、「吐了一口氣」（六一年）、そして「小鈴児」（三三年）、三〇年代半ばに試みて実現しなかった家史的小説、「正紅旗下」（六一、二年）と見て来ると、老舎の義和団事件への心情が彼の原体験から出発しているという事がわかる。

一方、中国に於ける義和団評価は作者と無関係ではありえない。その意味で義和団評価を研究史的に見ると、一九四九年以前は団民即ち拳匪、拳賊とされ、その迷信性、保守性が強調されていた。六一年当時は文革前夜とも言うべき時で、逆に義和団の革命性が強調され、農民達の自然発生的な行動を現代にひきつけて正当解釈していた。⁽²¹⁾そして七七年以降の農民の落伍性指摘の時期を経て、現在は更に多面的評価が試みられている。⁽²²⁾

「神拳」「正紅旗下」はこのように義和団が高く評価されていた時代に書かれた訳であるが、老舎自身も「吐了一口氣」で先に引用した部分に続けて、

しかし、私が目にした義和団関係の記述（すべて当時の知識分子のものであるが）は、十中八九、國民を非難している。連合軍の焼打ち、強奪については、逆に記述が少ない。そのような文人たちの記述ではなく、去年発表された民間の義和団伝説が、私を励まし、あの戯曲を書く決心をさせた。それらの伝説から、私は義和団の真の姿を理解した。戯曲の出来がどうあろうと、私はやっと数十年間積もりに積もった思いのたけを吐き出した、という訳である。と、彼の「神拳」に対する意気込みとともに、当時の状況を説明している。しかし「神拳」はたゞ義和団を讃美するだけの武勇劇ではない。描写の力点は、むしろ教会の力を借りる土地のボス、身の安全と商売のために義和団に入る男、洋人を怖れ二毛子とグルになる具知事などを描くところに置かれている。老舎が、当時新しく発見された民間の義和団故事に刺激されてこれを書いたと強調する所以は、今までの義和団認識とは異って、このように中国側内部の問題に焦点を当てた事にあると思われる。

「正紅旗下」は、早い時期に中断されているため、彼が義和団描写にどのような構想を抱いていたのか想像する事はできない。しかし、旗兵である二哥福海の十成に対する感情の起伏は、老舎の義和団への心情を明らかにしており、それは又、旗兵として中国のために戦って死んだ父や、清末に於ける多くの下級旗人の苦悩を代弁している。「旗兵たる者、造反する人間を支持すべきでない……」「もし旗兵でなかったら……」「しかし、私は旗兵である……」このような二哥福海の苦悩は、清朝のためよりは中国のために前途を憂えている彼らの姿を如実に描いているし、事実、清朝政府の弾圧にも拘らず、義和団に感化され彼らに協力するようになった旗兵も多かったのである⁽²⁷⁾。

溯って一九三〇年代の老舎については、『老牛破車』所収の各篇や、老舎自身の「八方風雨」⁽²⁸⁾、夫人胡絮青の懷古談「老舎夫人談老舎」⁽²⁹⁾などによって知る事ができるが、この頃の短篇「討論」⁽³⁰⁾でも彼は当面する抗日問題を義和団事件と結びつけて辛辣に皮肉っている。つまり、日本人の襲撃にうろたえる王大爺に使用人李福が教える避難方法は、すべて

ニセ義和団員となった李福の父が採った方法で、「それでは売国奴だ。とてもそんな事はできない」と言いながら、彼とその妻は結局李福の父と同じように白布に日の丸を描くのである。このような中国人内部の動揺、保身の様を、彼は見逃す事ができなかったのであろう。

老舎が一九二二年秋から二三年春まで、天津南開中学で国語を教え、その傍ら「小鈴児」を書いた事はすでに述べた通りである。彼は北京師範学校卒業後、方家小学校長となり、二二年（二三歳）に北京勸学所の勸學員となった。⁽³¹⁾間もなくその仕事を辞めているが、その原因を彼自身は、高給な割に仕事が閑で酒や芝居麻雀に明け暮れ、体まで毀してしまったので別の仕事に換えたためであると言い、⁽³²⁾羅常培は腐敗した教育界内部の抗争に巻き込まれるのを嫌った結果であるとする。⁽³³⁾

その後、彼はキリスト教に近づき、一九二二年には缸瓦市倫敦会基督教堂（現、北京基督教会缸瓦市堂）で洗礼を受ける。⁽³⁴⁾そしてその後天津での半年間をはさんで再び北京に帰ってからは、北長街教育會書記、灯市口北京公理會（キリスト教組合教会）地方服務団幹事、缸瓦市倫敦会教堂の日曜学校の教師などをする傍ら、教会で識り合った宝広林牧師⁽³⁵⁾を通じて燕京大学の艾温士(R.K. Evans)教授を紹介され、燕京大学での英文学の聴講を経て、二四年（二五歳）に、ロンドン大学（School of Oriental Studies 現 The School of Oriental & African Studies）の中国語教師として出発し、五年間滞在した。

しかし、一時期であるにせよ、老舎のキリスト教への傾倒ぶりは、父を連合軍に殺されたという個人的体験からするとやや意外な感がある。中国に於けるキリスト教自体も、一九一〇年頃から外国人の手を離れ中国人主導型、民族自立型へと質的に変わって来たようであるが、⁽³⁶⁾当然屈折した思いを持つ老舎がなぜこのようにキリスト教に接近したかは興味のある所である。一般的には、当時キリスト教が西洋の科学知識啓蒙の役割を果しており、彼も知識人の一人として知

識吸収のために近づいたと言う事も出来る。科挙の廃止（一九〇五年）後の知識人の質の変化も見逃せないが、老舎個人について見ると、五四運動を経験し、⁽³⁷⁾その後心身共に疲れて勸学員を辞任した直後にキリスト教に接近した事、教会での仲間に旗人出身の友人が多い事は注目⁽³⁸⁾に値する。彼にとっては、現実の社会に対する不満や批判を話し合い、中国の前途を考える拠り所が、現中国とは異質の文化圏である教会という場であったと言える。

この「小鈴児」は、彼が教会活動に深く係った二年余りの丁度中頃に書かれた訳であるが、襲われた「洋教堂」の子供の事以外には、宗教的色彩は全く感じられない。この小説はやはり着任直後で準備期間の短かった老舎が、永い間心の中に在ったテーマを選び書き出したものと見るべきであろう。

ところで「小鈴児」の結びは象徴的である。張り出された校長の告示を書くだけで、老舎自身の説明は一切無い。これは学校の処罰（に代表される力）に対する彼の無言の非難である。中国人として、外国勢力に対峙する時、帰って行く所が彼の原点——一九〇〇年に父を殺した列強への憤り——であるのは当然であるが、彼の批判の矛先は「小鈴児」を書いた時からすでに中国内部の問題、つまり義和団の時の二毛子や、その後の所謂売国奴の活躍を許す社会、そういった中国の現状に向けられていたと理解する事ができる。

五 結び

「義和団事件後の北京を舞台にした家史的歴史小説」が二回とも完成せずに終わった事は外的情況の外に、彼の義和団認識或いは義和団事件を通して見た社会認識の中に、彼自身葛藤した部分があった事を意味していると思われる。同時に「神拳」「討論」そして「小鈴児」も含めて、これら完成した作品が外国批判よりも当時の社会批判により比重をかけて書かれている事も、老舎という作家を考える場合無視する事はできない。直線的に愛国主義民族主義の作家と表

現するには、彼の視点はあまりにも内面に向けられている。それは、彼自身が八旗の子弟であった事に由来するのではないだろうか。

八旗の子弟である老舎が辛亥革命をどう受け止めたかという点について、現時点では十分明らかにする事はできないが、彼が新しく中国をリードする事になった漢民族の社会に対して、違和感、差異感を感じていた事は考えられる。一中国人として彼は中国を愛し、民族自立を強く願っていたが、満州八旗の末裔としての彼は、義和団事件の時の団員の意志や最後に連合軍に応戦した官兵たちの犠牲が生かされず、相変わらず混乱を続ける中国社会の体質に批判の目を向け、「二毛子」批判を通してその責任の所在を明らかにしたかったのである⁽³⁹⁾。しかし満州旗人であった自分の生い立ちを通して義和団事件とその後の社会を徹底的に見て行けば、結局は漢民族社会に対する批判へと発展して行かざるをえず、中国人としての自己認識が強まれば強まる程、それを前面に出す事は難しかった。又、彼の慎重な性格も、その配慮をより一層強めたかもしれない。「義和団事件後の北京を舞台にした家史的歴史小説」が二回とも中断した裏に、外的状況の他に、このような旗人の末裔としての老舎の葛藤を読みとりたい。

「小鈴児」は現在見られる限りに於て、老舎の創作活動の出発点である。彼自身は作家としての自覚を持たずにこれを書いたが、今日この作品を見ると、そこに語られている事柄は彼のその後の基本姿勢を十分に現わしており、後に二度もこの作品の存在に言及している事も頷けるのである。⁽⁴⁰⁾

以上のように見て来ると、下層社会を描くユーモア作家という老舎評価の他の一面も、実はそれも出自と体験とに基く彼個有の愛国主義民族主義に根ざしていたと言える。したがってその対象もまた、不変のもの、不変の力の源泉を希求した結論に導かれた選択であったと見なす事ができるかもしれない。老舎の統一像もこの観点に支えられて初めて描き上げる事ができよう。

註

- (1) 白丁「老舍學術討論會綜述」(『文史哲』一九八二年四期、三五—三六ページ)によれば、一九八二年三月に開催された老舍學術討論会では、老舍に対する革命後の評価の三番目に、愛国作家、人民芸術家である事を挙げている。
- (2) 共に原載『宇宙風』、後に『老牛破車』(人間書屋、一九三七年)所収。
- (3) 発見の経過については、『天津師院學報』(一九七九年第二期)所収の胡絮青「新発見の老舍処女作〈小鈴児〉読後」(三四—三六ページ)と董振修「老舍早期在天津活動和他的処女作」(三五—三六ページ)、及び曾広燦「老舍最早的一篇短篇小説」(『新文学史料』一九七九年第四輯、二七一—二七二ページ)参照。筆者は一九八二年三月天津を訪れ、董、曾両先生から直接お話を伺った。特に曾先生には南開大学所蔵の『南開季刊』を見せて頂き、天津での老舍についてなど数多く御教示頂いた。
- (4) 老舍は二箇所とも「南開中学」と表現しているが、『南開季刊』及び『南開校友』(一九三四年)では校名を「南開学校」としている。「南開校友」とは創立三十周年の校友会記念誌で、後半の校友録には「舒舍予、School of oriental study London E.C. England 教授中文」とある。南開学校は現南開大学の前身で、私塾から出発し、男子中学、大学、女子中学、小学校と発展していった。
- (5) 『南開季刊』(封二面)に「本校出版委員会全体撮影」という写真があり、老舍も収まっている。
- (6) 「南開季刊投稿簡章」があり、学生教師共同のもの、文言白話どちらでもよい事など、六項目が挙げられている。
- (7) 二期の本の収録作品は、中西経済思潮之分流・近代数学分析底導源・文化底起源・周秦伝記諸子引詩考略序・學術論・國際金融之極論・理想之兵制・世界鉅業之大勢・臨城煤鉅実習測量記・暑假中臨城煤鉅実習紀事・考試制度根本改革之我見・對於中學教授國文的問題・(目錄には記載されていないが、このあとに小鈴児が入る)・遊雪山記・売国賊(独幕劇)である。
- (8) 「小鈴児」は初め『天津師院學報』三三—三四ページに再掲載されたが、後に『老舍小説集外集』(北京出版社、一九八二年)に収録された。
- (9) 註16の「吐了一口氣」に詳しい。旗兵とは、清朝の軍事的行政的組織であつた八旗に属する者。老舍の父は、そのうち正紅旗

に属した下級旗兵であった。

- (10) 「我的母親」(原載『半月文萃』第一卷第九十期、一九四三年。後に『老舍写作生涯』天津百花文芸出版社、一九八一年、に再録)に詳しい。

- (11) 「抬頭見喜」(『老舍幽默詩文集』上海時代出版社、一九三四年所収。一九八二年香港三聯書店刊の再版本には収めない。『老舍生活与創作自述』三聯書店、一九八〇年と、『老舍写作生涯』に再録)と、註(10)による。

- (12) 「正紅旗下」「吐了一口氣」に詳しい。

- (13) 例えば、伊藤敬一「老舍の世界」(『東京大学教養学部外国語科紀要』卷二〇、二号、一九七二年)などがある。

- (14) 「義和団」として『劇本』(一九六一年、二・三期合本)所収。「神拳」として中国戯劇出版社、一九六三年刊。『老舍劇作選』(人民文学出版社、一九七八年再版)所収。

- (15) 原載は註(14)の『劇本』。『小花朶集』(天津百花文芸出版社、一九六三年)と『老舍劇作選』再版所収。

- (16) 原載『人民文学』(一九七九年三月―五月)。単行本として北京人民文学出版社、一九八〇年刊。日本語訳「満州旗人物語」(学習研究社、一九八一年)。執筆時期については、胡絮青「写在正紅旗下前面(代序)」による。この中で、周恩来、陳毅の講話に力づけられて執筆に着手したと説明しているが、これは直接的には、「題材問題專論」(『文芸報』、一九六一年第三期)などによって肯定された題材の自由化の事を指す。

- (17) 前註の胡絮青の文。「大寫十三年」は上海市長柯慶施が一九六三年元旦に上海の文芸工作者に向けて行った提案で建国以来十三年の社会主義革命と社会主義建設の現実を文芸に反映しようというものである。張春橋は後にこれを支持した。

- (18) 語言学者。旗人。一九九九年―一九五八年。西城第四学区私立第二小学堂での同級生で、その後も親交があった。

- (19) 羅常培「我与老舍―為老舍創作二十周年作」(原載は昆明『掃蕩』副刊、一九四四年。後に『中國人与中國文』所収。『老舍写作生涯』再録)又、舒乙「老舍的童年 六」(『人民日報』一九八〇年二月二六日号)にも同様の記述がある。

- (20) 佐藤公彦「義和団へ評価論争」をめぐって(『中国研究月報』三九八号、中国研究所、一九八一年四月、一〇ページ)による。

- (21) 戚本禹「愛国主義还是売国主義」(『紅旗』一九六七年五期)による映画「清宮秘史」批判がその最たる者である。
- (22) 王致中「封建蒙昧主義与義和団運動」(『歴史研究』一九八〇年一期)は、文革批判と義和団批判を結びつけて解釈した。
- (23) 一九六〇年には『張紹桓包打四什庫—義和団伝説故事』(張士傑搜集整理、上海文芸出版社)と、『義和団故事』(河北省民間文芸研究会編、人民文学出版社)が出版された。このうち、前者に収められた「大店の若旦那」は、「神拳」の田富貴の設定に影響していると思われる。又、張飛竜に結婚を迫られて死んだ高菊香とその父高永福の話は、宣化府双樹天主堂刊の『保安教伝』に載る実話に依っているとされている。義和団民話の日本語訳に『義和団民話集—中国の口承文芸1』(牧田英二、加藤千代編訳、平凡社、東洋文庫二四四、一九七三年)がある。
- (24) 単行本の八〇ページ。
- (25) 同八一ページ。
- (26) 同八二ページ。
- (27) 復旦大学歴史系・上海師範大学歴史系編著『中国近代史叢書・義和団運動』(上海人民出版社、一九七二年 三九ページ)。日本語訳に野原四郎・小島晋治監訳『中国近代史3 義和団運動と辛亥革命』(三省堂、一九八一年)がある。
- (28) 『新民報』(一九四六年四月—五月)『新文学史料』(一九七八年第一輯)所収。
- (29) 王行之、一九七九年著。『老舍生活与創作自述』所収。
- (30) 『老舍幽默詩文集』所収。
- (31) 老舍の略伝は、舒濟「老舍伝略」(一九七九年著、『中国現代作家伝略 上』四川人民出版社所収)、舒乙「談老舍著作和北京城」(『文史哲』一九八二年四期)、柴垣芳太郎「老舍ゆかりの胡同めぐり」(『東方』一二二号、一九八二年)による。
- (32) 「小型之復活(自伝之一章)」(原載『宇宙風』第六〇期、『老舍写作生涯』所収)。
- (33) 註(20)による。
- (34) 『中華基督教年会鑑』第七期(一九二四年)の「著者小伝」に見える。

(35) 『生命』(第三卷三号、一九二二年)に老舎が宝広林の英文を中国語訳した「基督教的大同主義」がある。

(36) 山本澄子『中国キリスト教史研究』(東京大学出版会、一九七三年)前編第一章。

(37) 「我怎樣写趙子曰」(原載『宇宙風』後に『老年破車』所収)、「五四给了我什么」(原載『解放軍報』一九五七年五月四日号。『老舎写作生涯』所収) 参照。

(38) その中には宝広林、白滌州、舒又謙、趙希孟などがいた。

(39) 「茶館」(『収獲』創刊号、一九五七年)第二幕に見られる常四爺の次の言葉は、旗人としての老舎理解の手がかりとなるであろう。「牢から出て間もなく庚子の年(一九〇〇年)となった。扶清滅洋、わしは義和団となって、洋人と戦った。さんざ戦った挙句、大清国はついに滅びた。滅ぶべきだったのだ。わしは旗人だが公平に言っているつもりだ。(略)いつか洋人がまた出兵して来ても、この常はまだやつらと戦う準備をしている。わしは旗人だが、旗人だって中国人なんだ。あんた方お二人はどうなんです?」

(40) とりわけ象徴的なのは、主人公小鈴児の名に徳森という満州族の名を用い、他の登場人物の張、王、李などといった中国人名と対照をなしていることである。ここにも老舎の意図的な表現を見ることが出来る。尚、満州族としての徳姓と森という名の実例は『清代職官年表』(中華書局、一九八〇年)などに散見する。但、彼の家史的小説「正紅旗下」に、この名は見えないが、それも老舎の配慮のあらわれであろうか。